向陽新聞
高知市塩屋崎町1の2
土佐中・高校新聞部
編集人　植田　信広
　　中東　広志
発行人　上村　公志
印刷　高知印刷

写真
TEL ② 6758
大丸東入口前
高橋

野球部合宿所 三月着工か

他の部にも刺激

▽……去る十一月二十三日より松山市営球場で開かれた四国地区秋季野球大会において……△

▽……て本校野球部は大会前の評判をよそに、破竹の勢いで進激し他県勢を寄せつけ……△

▽……ず二位の座を獲得した。これで今春の甲子園行きは決定的なものになったが、……△

▽……その勢いに上じ、かねてからの部員の念願であった合宿所設立も具体化され、……△

▽……近く実現されそうである。部員は今、二重の喜びを味わっている。また、これ……△

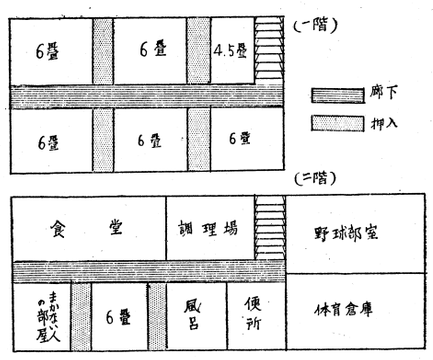
▽……に刺激されたバスケット部、ハンド部等他の運動部の動きも注目されている。……△

本校は総勢一二人という小人数でしかも二年生の多い新チームでありながら、上岡、広田両投手を軸として、よくまとまり、打線も上下むらがなく打て、終止おちついたチームプレーを展開した。

大会後籠尾監督をして「最も警戒を要した怖いチーム」と語らしめた丸亀商、下馬評では絶対有利をうたわれていた古豪徳島商を文句なしに打ち破り他県勢をよせつけなかった。

これらの下馬評を次々とくつがえした好成績は、精神力の勝利ともいわれ、部員の闘志並に籠尾監督の好采配は高く評価された。これで本校の二年振り五度目の甲子園出場は決定的なものとなった。

当部は今、あこがれの甲子園目ざしての練習に励んでいるが念願の合宿所設立の計画も進行しておりその周囲は明るい話題に包まれている。



新聞部員による見取図

合宿所を作りそこに部員を下宿させて活動をやるというのは籠尾監督の監督に就任した頃からの理想であった。

すなわち散在している下宿生活を一ケ所に集めて団体行動を取りやすくし活動の能率を上げると共に、編入生の学力の格差を野球をやりながら合宿所で補習等をやりカバーしようという考えであるが、近年郡部の者や編入生の部員が急増した為是非ともこの計画が必要となって来た。

又、ある時監督の家で勉強して帰りに部員が不良につかまり暴行を加えられたという事故もおき、父兄からも是非！という要望が高まってきた。さいわいOBや後援会でも支持が高まっており、この計画が実行されることはほぼ確実である。

籠尾監督はその具体的な計画について次のように語ってくれた。

「場所はできればグラウンドの内で前の部室があった所、サッカーや他の運動のじゃ魔にならない程度に合風で壊れた体育倉庫と野球部室は学校が再建するだろうが、野球部としてはそれを一階にし、その上に、二百万円位の予算で六畳五間位のものをたてたい。食堂、便所つきだ。つくってからは、部員特に編入生の為に先生をよんでそれも野球部関係の先生中心となると思うが補習を行ないたい。」

部員に意見を聞いてみると「合宿所を作るということは前から聞かされていた。たぶん3月頃になるんじゃないでしょうか。とにかく是非実現して欲しいと思います」とのこと。

又、校長は次の様に語っている。「野球部の計画は、集団生活によるお互の人間活動の向上の為にも大変結構だ、学校としては今回のことには、経済的には何もできないが、父兄や後援会が主となってやってくれればと思っている。また寄宿舎制というのは野球部に限らず部活動として理想的だと思うので、改築の際には他の部にも考える」

自転車通学生よ！ 和田君に協力しよう

自転車置場の混雑ぶりは本紙六十七号で取りあげられたりして、問題となっているが、その混雑ぶりを少しでも緩和しようと自転車の整理に乗りだした人がいる。一H の和田耕作君である。

彼は十一月以来毎朝、この寒い中をテニスコート横の自転車置場で自転車に乗って来た人達に自転車の置場所を指図している。そのせいか最近は通路も広くなり、自転車もよく整頓されている。

彼は「朝、十分くらいだから、寒さなんか気にならない。僕一人で指図するには台数が多すぎて、忙しい。できれば、四ー五人手伝ってくれる人がいてくれたら…。」と言っている。

自転車通学の諸君よ！朝、置場で彼に会ったら「オハヨウ」とでも「アリガトウ」とでも言おうじゃないか。また彼の手をわずらわせないように、彼の配った〝自転車通学についての注意〟のプリントをよくみて、守ろうではないか。

奥宮さん（一B）なくなる

始業式の日ただ一日登校しただけで休学していた一Bの奥宮順子さんが十一月九日土佐山田町神母木の自宅でなくなった。告別式は十一日、一B代表と片岡先生も出席して、ひっそりと行われた。

奥宮さんは始業式の翌日、頭痛のため、かかりつけの医師に診てもらったが病因不明で、京大付属病院で精密検査を受けたところ脳腫瘍であることが判明、四月末に入院して手術が行なわれた。経過よいよいよ三学期！高三生の皆さん、御卒業後もこの「ソノシート」を聞き、楽しかった土佐高時代を思い出して下さい。

卒業記念品 ソノシートを

ひとこと

○…本校で昨年発足したものに「美化委員会」がある。この美化委員会のスローガンは「学校をきれいに！」というのである。その学校をきれいに！の内容は花を飾ろうなどと数々あるが、注目すべきものが一つ「上ばき、下ばきの区別をはっきりさせよう。また上ばきで歩いてよい所は校舎内とセメントの道の上だけだから守ること」というのがある。

○…はたして現状はどうだろうかとみてみると、土佐校へ来ている生徒達は皆だいたい上下の靴を二足持っている。たまに貧乏な生徒がいて上下で一足しか持っていないのをみかけるが…。いやいや、彼等は貧乏ではなく、自宅も土足であがれるようなモダーンな家に住んでいるのかもしれない。高知にもこんな文化的な家があろうとは……高知もまんざら田舎でもないようである。

○…さて上ばきで下を歩いている生徒を数えていればきりがない。厚顔？の美少年、美少女達は顔を赤らめもせずセメントでない所を歩く。先生方が朝礼の時にする注意も彼等には〝馬の耳に念仏〟である。その馬共は食堂へ行くのに本能をむき出しにして校舎と食堂の間、最短距離のジャリの上をニンジンじゃなかった、ウドンめがけて疾走する。あわれな姿である。本能と言えば、西の男子便所へ行くのにも校舎内を通らないで昇降口からジャリ道へ降りて、これまた最短距離でという生徒が多いようである。そんなに急がなくちゃあならないのかねェ？

ところで先生方も先生方である。セメントの道を先生が通る時、すれ違う生徒は道が狭いので先生を大きくよけ、セメントの道から降りる。それをみても先生は何の注意もしない。自分に道をあけてくれたことのうれしさからだろうか。これじゃ学校側は黙認しているのも同然である。しかし今のセメントの道は低く、通路というのには狭すぎる。しかしこの通路、僕達は通らなくても目的地へ達するはずである。わずか十メートルやそこら遠くなったくらいでくたばるような年齢ではないはずだ。

ところがその若さでも通路なしではいけない所がある。いうまでもなく〝レストラン・トサコー〟である。こんな絶対通路なしではいけない所に通路がない。実に矛盾した話である。食堂と第三昇降口の間は僕が入学して以来四年間何の処置もされない。学校側は気付いていないのだろうか。早くなんとかしてもらいたいものだ。

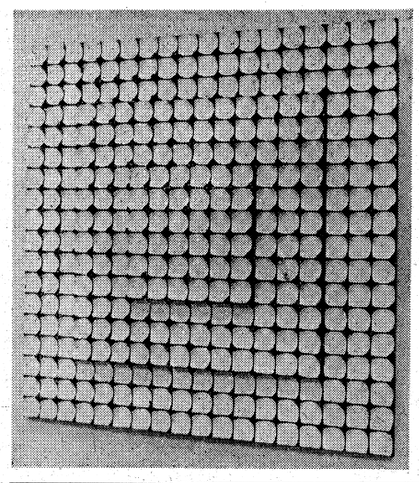
○…校舎新築の噂が乱れ飛んでいる現在、寄付金を出すのを嫌がる諸君よ！この美しい？校舎をきれいにせずとも、せめて汚すことのないようにしようじゃないか。

（H・K）

通りゃんせ？

県展 高崎先生 「褒状を獲得」

去る十月三十日から十一月十四日迄開かれていた第十九回県展に高崎元尚先生が〝装置〟を作品され、褒状を獲得された。作品には「ニューヨーク行き第一号」という題がつけられていた。これは先生がすでにジャパン・アート・フェスティバルの出品作家に選ばれており、今年の三月にニューヨークで作品を展示されることになっているが、その時出品される一つだからである。



出品作品〝装置〟（ニューヨーク行き第一号）

先生自身この作品が最高のできだと自慢されるだけあって、鑑賞に訪れる人達の眼を奪っていた。

高崎先生談

今までの作品〝装置〟の中でも今度の作品は特に絵画的な要素が、がっちりしていて最高の出来だと思う。あの題はちょっと皮肉にとられるかもしれないが、この作品をアメリカへ持って行くのだということを知ってほしいためにつけた。僕自身、僕の絵はすでに県展のワクをはみ出したものだと思っているが、出品することによってこんな芸術もあるのだということを、一般に知ってもらいたいし、またファンにもみてもらいたいと思っている。

主張 玄関脇に長蛇の列

現在本校には二カ所のパンの販売所がある。うち、一つでは二つに分れて売っているから、厳密にいえば三つである。学校が毎日、とり寄せているパンは約九百個……一人が二個ずつ食べるとしても四百五十人……正確な数値ではないが、一カ所にのべ百五十人の列ができることになるから、その混雑もひどい。三時限終了のベルが鳴り終ったとたん、方々の教室から、ワッとばかりに生徒の群がおし寄せ、狭い廊下はたちまち生徒で一杯となる。〝男も走る、女も走る〟社会科準備室の前の廊下は、パンを買う者買ってもらう者、食堂に急ぐ中学生等で一時は、交通マヒの状態になる。授業を終って職員室に帰る先生達も両手で、人波をかき分けるようにして通っている。こういう行動が無言のうちに行なわれるのでは無論ない。ドタドタ、ワイワイと校舎がボロいだけに、その音も余計に響く。側の教室ではさぞ迷惑なことだろう。一方、売店の方でも同じような混雑がある。そのおわりが、玄関脇に届く程の長蛇の列である。また、その割り込みもひどいものがある。女子はさすがに割り込みはしないが、代わりに並んでいる者に買ってもらっている。これとて割り込みと同じことだ。そうして男の生徒が並んでいる前で、平然としている。その図々しさには全く驚かされる。新聞部に舞い込んでくる苦情や意見に、よくこのことがある。これらは、勿論生徒がだらしないということもあるが、一方ではそうしなければ早く好みのパンを、買うことができないというきびしい現実もあろう。実際に、ウロウロしていると食べたくもない残りもののパンを買わされたり……これならまだいい方で、さんざんまったあげくにパンは売り切れ、ということもある。昼休み後の売店の乱雑ぶりもひどい。時間が足りなくて？その場でつめ込むのだろうか、牛乳ビンや、パンの包み紙があちこちに散在しているのは、余り良い感じを与えない。またこんな食べ方で、すぐ勉強に移るのも――特に体育は――健康上良くない。

パンの予約販売を

これらの問題を、一気に解決してくれるのがパンの予約販売制度である。これはクラス単位でその日の朝の間に、まとめて売店の方にパンと牛乳を注文する方法で、こうしておけば昼休みまでに売店のおねえさんが、箱に注文の品をつめておいてくれるから、あとは一人か二人でそれを取りに行けば良いのである。現在二Kをはじめ八クラス程がこの方法をとっているが、「この方法を始めてからは、三時間目の授業が落ち着いてうけられるようになった」「これまで並んで、買う順番を待っていた時間が有意義に過せるようになった」等といずれのクラスでも仲々の好評でもある。

しかし二十九クラス全部がこの方法をとるとすれば、問題がない訳でもない。売店では、この二人では今のままで精一杯ですと悲鳴をあげている。実行するとすれば、新たに人を雇わねばならないだろう。またそれだけ多くの箱がいる。それに問題はパン屋にもある。もし注文通りの数をカッチリ望むならば材料その他の関係で、二日前に注文しなければならない。しかし買う方にとって見れば、その日その日で違うもので、二日先の昼飯の予約となれば少々おっくうである。そこで、売店の方で二日先の予約の見込みをつけて注文しなければいけなくなる。この見込みがむつかしいそうだ。しかし現在でも、その売れ行きにそれ程の変化はないし、だいたいの見込みはたつはずだ。またある程度多く注文しておいて余りをパン屋の方へもどすようにしてもよい。それも多少の問題はあろうが……、とにかく今のような状態では、教育上良くないし第一、体面にかかわる。「おまんどだい土佐へ行て見たら生徒がみんなあ走りよった」などといわれてはたまらない。学校側はこの際損を承知で我々のためにぜひこの方法を考えて欲しい。

一般生徒の参加認めず

文化部のみで文化祭を

今年の文化祭も例年通り文化部のみの発表会として開催されることになった。

これは十二月八日に開かれた職員会で決定されたものである。この会では文化祭に対して〝文化祭は文化部および文化同好会の発表会である〟〝文化祭への一般生徒の参加は認めない〟ということを確認して、執行部に連絡された。このために執行部の計画していた〝今年度の文化祭には、一般生徒の参加を認め、アクセントを付け、内容をバラエティーに富ませる〟という案は流産となってしまったわけである。

学校側としては〝以前に矛餞会（卒業生を送る会）を行なっていたのだが、だんだん生徒に真面目さが欠け、収拾がつかなくなってきたので矛餞会を廃止した。もし文化祭に一般生徒の参加を認めた場合には、これと同じ結果を招く可能性がたぶんにあるということになって、参加を認めない〟ということだ。また〝文化祭とは平常発表する機会の少ない文化部の発表会である〟ということもその一つの理由に挙げられている。

文化祭小委員会では「一般生徒の参加が認められなかったのは残念だ。ただでさえ文化祭が衰微しつつあるのに、これではその傾向に拍車をかけるばかりだ。」という。

生徒の間では「文化祭は文化部だけのものでよい。」「一般生徒の参加を認めてほしい。」という反応もほんの一部でみられるが、大部分は無関心である。

ここ数年、文化祭にはマンネリの傾向がみられるがその原因は毎年の文化祭で、免疫が出来てしまったのか、文化祭へは何ら注意を向けなくなった学校側と大多数の生徒の無関心にあるという説が強い。

文化祭もこの辺で、方法・内容などを検討しなければいけない時が来ているようだ。

【三面に関連記事】

眼を大切に

男子43％・女子37％が近視

最近、眼を大切にしていない人がふえてきたようだ。そこで高知市内にある六校を対象に近視者率を調べてみた。

まず1図を見ていただきたい。これでわかるように上級になるにしたがって近視者率は高くなっている。十二才の男子（中一）は二十九％で五十三人、女子は十五％で八人に対し、十七才（高三）の男子は五十％で百五十一人、女子は六十六％で四十七人である。これについて保健担当の浜田先生は「勉強勉強とおわれているせいか近視の人が多いが、各人が机に向かった時の姿勢や部屋の明るさに気をつけて、眼の健康に十分注意してもらいたい。」と、言われていた。

次にII図をみてみよう。本校は男女共高知について二位を占めており、一番少ない工業に比べ男子は一・九倍。女子は一・五倍となっている。これらのことから、我々はいかに眼を軽視しているかわかるであろう。皆さん、眼を大切にしようではありませんか。

校名	男子	女子
本校	43	37
高知	46	45
追手前	36	36
西校	32	33
工業	23	25
土佐女子	／	33

性別＼年令（才）	12	13	14	15	16	17	18
男子	29	30	44	50	42	50	53
女子	15	30	35	42	34	66	／

I図　下；本校の性別・年齢別近視者率（％）

II図　上；市校六校の性別近者視率（％）

英語弁論大会 小笠原君（一T）優勝

十一月三日福祉会館で開かれた第十八回中学高校英語弁論大会の高校の部で、一Tの小笠原貞一君が、出場者八名中一位となった。この大会は毎年高知県英語教育研究会の主催で開かれているものであるが、本校が一位となったのは数年来のことである。

小笠原君の演説の題は〝CALLING AND STANDING BY〟というもので、〝私はハムです〟から始まる。内容は、小笠原君が、ハムに興味を持ち始めてからハムになるまでと、その間の難関高校入試、彼に対する家族の思いやりなどを述べたものである。英語担当の扇谷先生は「身近なことを習った英語で、多くの人の前で話すということが大切だ。」と言われる。

小笠原君談

他の人の演説を聞いて、自分が一位になるとは思ってもいなかった。うれしいというより意外という気持の方が強い。

編集後記

やっと出た！しかも四面が。編集長以下部員一同ホッと胸をなでおろしているところである。

その間、部員の家に泊り込むこと数回。夕日が沈むと共に仕事を始め、新聞を睨みながら日の出を拝むことも二度三度。まさに向陽新聞の面目ここにありである。

時期はずれの記事、独壇に落ち入った記事も少なくないでしょうが、とにかく一所けん命やりました。このうえ読者の皆さんの御批評でもいただければ、これに越した喜びはありません。

校内短信

○…片山忠三先生（物理）は家庭の事情により十一月十日で退職された。片山先生の担当だった授業は講師の田中先生と理科の先生の間で担当し、ホームは山岸先生がうけもっている。

○…国沢義雄先生（体育）先生は肝臓機能障害のため九月一日より休んでおられたが、十一月で退職された。

ギデオン協会より聖書を

去る十月二十六日、国際ギデオン協会より本校生徒の希望に聖書が贈呈された。聖書は厚さ七百九十ページの和英対訳でイエス＝キリストの教えが書かれてある。

この日は約百名あまりの生徒が図書館に集まって、協会の方の話を四時から一時間ほど熱心に聴いた。

ギデオン協会とは、一般の人にキリスト教を理解してもらい、イエス＝キリストの教えを自分達の救世主として知るようになってもらおうと、世界六十ケ国以上の人々が親交と神への奉仕のために団結した団体である。

片岡先生談

本当にきれいで元気な子でした。今でもあの子が死んだとは信じられません、順子さんへの何よりのプレゼントは最後まで籍を一Bにおいて、皆の友情が順子さんに注がれていたことだと思います。

学び

▼皆さん新年おめでとう。冬休みは有意義にすごせましたか。フレッシュな一九六六年がスタートしてから今日までもう二十日余り。街々の新春ムードもやっとおさまりましたネ▼干支によると今年は「火災が多い年で、この年に生まれた女は夫を食い殺す。」なんて日くつきの丙午（ひのえうま）にあたります。「幸いそんな恐しい女性は本校には一人もいないようなのでひとまず安心。まあせいぜいこの伝統ある木造バラック？建ての校舎を灰にするなんてことのないように気をつけましょう▼さていよいよ三学期。学年の総決算とでもいうべき重要な学期ですネ。ことに高三の方はますます受験勉強の追いこみに忙しくなり、まさに師走ならぬ高三走の様相を呈することでしょう▼しかし高三生はともかく、それ以外の者までが「だもう勉強に追われてこの学期を終わってしまった…」などというのではいかにも学校生活が味気ない。ルーズといわれるかもしれませんが、ある程度勉強の方を犠牲にしてでも部活動なり学校行事なりにもっともっと若いエネルギーを発散させたいものです▼その〝学校行事〟ですが、あますところ文化祭だけですネ。しかし悲しいことにこの催し、年々無視されていく傾向にあるようです。生徒はマンネリじゃないかとソッポを向くし、先生方は「マンネリって事がそれほど悪いとは思わない。」▼そこで今年は執行部が立ち上り、「マンネリを打破するためには希望生徒の自由参加を認めるほかない。」と訴えてくれたんですが、あまりにもかぼそいお叫びであったためか、生徒の間にそういう動きを感じさせる事もできないうちに職員会議で否決されてしまいました。日く「文化祭は元来、文化部の成果発表の場として発足している。今さらその方針を変える必要はない。」と。じゃあ、いっそ「文化祭」という名称を変えたらどうでしょう。生徒がイヤイヤ見に来るような催しをとても文化の祭典とは呼べないじゃないですか▼何も文化部発表会が無意味だなんていいません。しかし文化祭が文化部の独壇場になってしまう時、我々生徒が本当の意味でこの行事に参加できないのは当然だと思うのです▼まず希望生徒の参加を認めて下さい。「甲し込みが多くなって困る」などというのだったら逆にそれこそ喜ぶべき事。文化祭と文化部発表会を区別して別の日にやってもいいじゃないですか。そして双方が芸を競うのもまた一興でしょう▼土佐校のルネサンス、考えただけで楽しくなりませんか。本校にも隠れたダ＝ヴィンチやシェークスピアがきっと？いるはずなのです▼だからと言ったら少し語弊があるかもしれませんが、とにかく来年、いや今年こそ我々生徒の方からムードを盛り上げていって文化祭を本当の意味での〝情操教育の場〟にしようではありませんか▼野球部の甲子園出場確定という実に明るい見通しの今年です。この上文化祭大改善でもやれば土佐校万々歳だと思うのですが…。（N・U）

高知一の定評　うまい鮨は
菊寿し
電話　②3366　③3030
お二階も一般席ですので
お気軽に御利用下さい

制服
入交　学服
中ノ橋電停前
TEL② 1776 2744

気楽な雰囲気です
新しい味の名所
富貴園
氷物、冷たい飲物
わらびもち（50円）
お好み焼（120円）
帯屋町高南ハイヤー地階　TEL ③3640
御家族連れでもどうぞ

修学旅行感想記

×　これは今回の修学旅行の感想記です。たった二×人で書きつづりましたので感想も狭く、独断的に×なってしまいました。それでも興味を持って頂け×たらと敢えて提出する次第です。　（K・S）×

出発！（第一日）

十一月六日午前、僕達は高知駅を出発した。明るい南国の空の下日射しは容赦なく射し込む。まだ華いだ気分は湧かない。

思えば高校生活中のこれが最も大きな行事かも知れない。それがもうやって来たのだ。耳を圧するトンネル群の合間に、部落や緑色に澱んだ川が次々と過ぎ去ってゆく。過ぎ去るものは寂しい。

歌を歌っているともう終着点に近づいて来た。丸亀城が小さい。車窓を過ぎていった。何んだかもの哀しかった。あんな小さい城に城主が、かっては一国の城主が、権勢を誇っていたこともあったのだ。太陽は赤味を帯びている。

高松で関西汽船に乗り込んだ時は太陽はさらに赤かった。船室では座席が足りないので激しい口論がくり返された。熱気でムーンと熱い。船は小刻みな震動をつづけている。

金色に変わった太陽が、感動深く西に没すると、暗い夜のとばりが降りた。デッキにもたれている人の髪が風になびいている。船は運命のように暗闇を突き進む。誰もがいじらしく遠くに目を投げている。

やがて甲板は社交場となった。踊り狂ってる。興奮しているのだろう。こんなに同胞が集ることは珍しい。それがたまらないのだ。海からは風が吹きつける。じっとしてはいられないのだ。誰も彼も月である。　（K）

戸畑工場の化物（第二日）

小倉公園でほのかに温い朝食を取ってすぐ、バスは八幡戸畑工場に入った。

ここは大きな怪物である。朝靄にかすむ遠望を内に含み、レールは草原を埋めつくすがごとく網羅され、あの偉大な空の一角を鉄のパイプはくっきりと遥っている。泊地には五万屯級の船が悠々と腰を据え、鉄光りするカマキリが彼のうちから石炭を運び出すのを待っている。異様に黒い建物群の谷間には舗装路がまっすぐに貫れ、どこに果てるとも際限がない。僕たちは一つの工場敷地内にかくもひたむきなものがつくられていると、かって想像し得たであろうか。バスはのろのろ歩んで行ったが、窓外には黒い石炭の山、灰色がかった石灰石の山、そしてレンガ色の鉄鉱石の山が見えかくれした。

黒いザラザラした土をきくさくと踏んで高炉につき出銑を待つ。しばらく待つと銑鉄がふきでて来た。細い、細い連路を溶岩の色に染まった鉄は火花を散らしつつ眼前に迫って来る。作業場は一時に燃え上り、赤い光がその壁をべロべロとなめまわす。火と人間とが一瞬の勝利をかけて対面しているようであった。対決ということばがふっと脳裡をよぎった。

高炉で僕たちを拒否し去った。この溶岩はゆがってストリップ工場において次第に鉄としての色、形を整える。第三ストリップ工場で見たものはその完璧なオートメーションであった。巨大な組織。人間がかっては造り上げ、今は人間を呑んでいるこのメカニズム。今や人間のどこに存在する価値が認められだろう。機械はひとりで動いていた。真紅の鉄板は伸びるようにレールを滑り、たてにされ、横にされ、たたかれ、固められて次第に鉄の形態を整えて行った。作業音はウォーンウォーンと耳を圧し、しばしば僕たちは無音状態に陥ったのだ。

この間を無駄に捨て去ることができないのだ。海はこうこうと満

四百年の歴史と共に（第三日）

"ポー"と汽笛が尾をひいて、どんより曇った空に消えていく。平戸海峡につき出した左手の山の上に亀岡城（平戸城）が、その白い城壁を見せ、山の黒さとのコントラストが印象的である。正面に迫った山の中復にはカトリック天主堂が木々の間から見えて、どこか異った情緒を醸し出している。そして山と海の間にへばりつくように発達した町並みからは、長い時の流れからとりのこされて海のむこうで眠っていた町という印象さえうける。

オランダ塀に沿って商館跡にむかうころ雨が降り始めた。がっしりと築かれた石垣に繁茂した蔦の葉が雨にうたれて美しい。その石垣をじっとながめている。雨は傘の上で規則的な音をたてて踊っている。ふと幻想が過る。石畳を登るバテレンの華やかな姿が映し出される。

商館跡に建てられた観光資料館でジャガタラ文を見る。国外追放の目にあったキリスト教徒の母国への慕情を書きつけたものであるとかで"日本恋しや"で始まる文はペーソスを誘う。

松浦資料館で解散の後、天主堂にむかう。ようやく登り口を聞きあてたころ再び雨が降り始める。石畳の道に沿って色褪せた白壁の土塀が続き、処々崩れかけ雑草がその瓦の間から覗いている。ものの寂た塀のむこうに寺院――それも鐘堂や屋根の反り具合などにどこか異国的情緒を感じるのであるが――が建ち、その上に天主堂の尖塔が煙っている。相い入れあうはずがない寺院と天主堂。それがここでは変にマッチして平戸の情緒を作り出している。

天主堂に着くと静まりかえっていた。そこには誰もかき乱すことのできない何物かが漂っていった感じである。正面に立って見つめていると、その偉圧するようなゴシック式の建物が体全体をもって話しかけてくるような錯覚さえ起る。荘厳……。そんな言葉があてはまるような気がした。

天主堂を出た時はもう晩秋の太陽は山にかくれ、平戸の町にも明りがつこうとしていた。町中にはいると悪臭に近い程の魚の臭いがむせかえっている。軒には干魚が見られる。通りには人の姿が絶えて窓から漏れる光が雨といっしょに黒いアスファルトの上で踊っている。しとしととした雨と静寂が町を包んでいる。

あのバテレンの行きかう物語りはもはや遠い昔の語り草である。今の平戸はもう漁師の町でしかありえない。そしてかすかに昔の夢を天主堂やオランダ塀が残している。四百年の昔の栄華は再びこの平戸に訪ずれることは決してないだろう。　（S）

噴煙をあげる阿蘇

黒の偉容……熊本城

＜第六日＞

早朝の水前寺公園は眠りから覚めたばかりであった。静かな朝の、中にすがすがしい美しさがむかえてくれる。旅に出てはじめて朝のすがすがしさを知る。透みきった池には幽い清水が凍々と湧き出で湯煙がその水面に舞い朝日があたって幻想的な雰囲気を醸し出している。

熊本城。それは偉容な黒さの中にたくましさが見られる。そりかえるような石垣、どっしりとしたたたずまい。城郭という名の芸術作品。西南の役の長い籠城にも堪えぬいたという名城だったとかで、新しく建てられたビルディングからもその昔がしのばれる。銀杏城とも呼ばれ、城内にはあちこちに古い公孫樹が見つけられ、その歴史をものがたっていた。

石垣の黒と銀杏の熊本城をあとに阿蘇にむかう。広々とした熊本平野……。その中を一直線に国道五七号線は黒いじゅうたんを敷いている。街道の両側にはハゼの並木が続く。（ハゼから蝋を作ると

か）、バスは快適なスピードで進む。そして我々は快適ないねむり街道をひた走る。"雨は降る降る田原坂"の名調子も素晴しい子守歌となって我々の耳にはいる。

阿蘇の外輪山が目の前に立ちはだかる。なぜか我々の侵入を阻んでいるようにさえ思える。そんな威圧的な大きさである。道は外輪山のただ一つの裂け目である白川に沿って続く。自然を負かすものはやはり自然である。裂け目の内側、そこには一つの社会が……。山あり、川あり、平野あり。そして町や村がある。山の火口原とは到底思えない。ふと桃源郷とはこんなところじゃないのかなと思われた。山麓に広がる規則正しい針樹のようなだらかな曲線を描く杵島岳を左に見ながら進む。

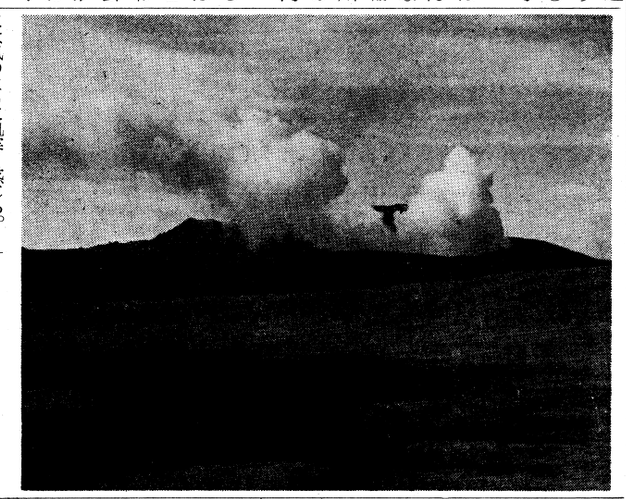
阿蘇は風が吹き荒れていた。火山岩の混った黒い土の上に立っていると、硫黄のにおいのある冷い風が顔を吹きすさぶ。寒い。旅行前から伝えられていた活動は今尚続いている。爆発の虞れのために期待していた火口を見ることができない。ガラスを破られた建物、動かないロープウェイ。阿蘇は、いや自然は我々を嘲笑している。「俺の一吹きで大騒ぎか。騒げ。騒げ。ワッハハ。」と笑っているようだ。

白い噴煙を濛々と上げている中岳を見ていると、何だか阿蘇が恐しくなってくる。ヘリコプターがこれ幸いとばかり観光客を呼んでいる。一度火口を覗きたかったが一回千五百円とかでは帰途の我々には風のように肌寒く感じる。

草千里での小休止のあと、煙をあげる阿蘇を、横目でみながら出発。坊中（阿蘇町）で昼食をとりバスは、山なみハイウェイにはいる。後には仏陀を寝らしたような阿蘇三連峰が聳え、そのむこうには外輪山が連っている。そして灰色の雲海の中に、五木の子守歌で有名な五箇所地方がかすんでみえる。秋も終りに近いころだったので、牧草の干草つくりが盛んであった。道の両側に広がる牧場に、牛がのんびりと草を食べている横で忙しく働く人の姿もみえる。牧歌的な風景である。

裏別府といわれる湯布院の静かな温泉郷をあとに、いよいよ別府の町にはいる。別府での地獄めぐり、パイプのはりめぐらされた各地獄はもうすっかり観光地化されてしまっている。荒々しいはずのあのワニまでが、去勢されたように、そして無気力に横たわっている。あまりにも味気ない地獄めぐりであった。もう少し素朴であってほしいという考えは、最早通用しないのかもしれない。もの寂しい不満を懐きながら最後の宿へ。

最後の夜は、いつになく賑やかだった。T先生などは生徒の中にはいってきて、一緒に楽しんでいた。最後だから、そんな雰囲気があちこちにながれている。消灯の時刻をすぎても、あちこちから明りが漏れていた。そして思い出したように物音がきこえてくる。



火の国

九州を後に（第七日）

別府港を出たのが七時半。チャーター船"国東丸"は九州をあとに四国高浜にむかう。別府港で、いつまでも手を振っていたガイドさんの顔が目にうかぶ。"さようなら…"そんな声が口から漏れる。横になっているものが随分みられる。昨夜の疲れだろう。一時間くらいすると船は大揺れに揺れはじめる。外海のうねりに襲われたようである。悪夢のようだ。話す気力もない。皆んなグロッキーである。そんな状態が二～三時間続きようやく治まる。

松山についたのは二時頃。そこで、見慣れた赤バスをみつけた時"修学旅行"は終ったのだな"と思わずにはいられなかった。バスは高知にむけてひた走る。

高知についたのはもう八時半になろうというころだった。一週間もの長い旅の後の町の灯は、やさしく我々の旅の疲れを癒してくれる。ああ、もう高知の町だ。そんな安心感が漂っている。もう歌う気もおこらない。今に"思い出の修学旅行"も終ろうとしている。その寂しさかもしれない。

公園での散会式の後、皆、思い思いの方向に散っていく。しかしまだ旅行の想いにひたっているのかあちこちに人溜ができ絶えようともしない。いつまでも話し声がきこえてくる。　（S）

高知の町の灯だ

修学旅行の御案内です!!

八幡製鉄戸畑工場

だだっぴろい工場だけど日本一だと聞くとその名にしてはオソマツです。しかしそれでも世界第四位の生産があるという。

泊地に行った時、マチガッて写真撮影してもいいという情報が流れた。それっとばかりカメラマンは外へ、気がついたものの後のまつり、先生方必死で中止を促したが、その間にも方々でパチリパチリ。要するに泊地の写真は我々のカメラの中に相当はいってるはず。

太宰府

いにしへ日本の玄関口。道真を祭ったはずの八幡宮は今はお守り札販売所になっている。学問の神様というから修学旅行相手にはもってこいでしょうね。

福岡市

森太兵衛さんで有名な黒田武士、黒田武士で有名な黒田五十二万石、その城下町が福岡。

市制明治二十二年、現在の福岡は、城下町福岡と商人町博多の合併したもの。市名をどちらにするかでもめた後、投票僅か一票差で福岡に決まったという話。

平戸市

旧松浦藩城下町。半農半漁のわびしい景観の地である。室町期から江戸初期に外国貿易で繁栄したがそれも今は昔のお話。

雨にたたられて不満顔だったこの修学旅行の皆さん方、平戸を去ると、彼らの平戸の感想は「雨の平戸はロマンティックだったなあ」

平戸の海は休む間もない。昼はザンザカ雨が降る。夜は夜として旅館の窓からガラスびんが降りつづく。思うにあの修学旅行以来、平戸の海のアルコール分が幾分かは増してるはずなんですがね。

長崎市

あまりにも遺跡の多い町。鎖国日本の中にあって、当時外国の息吹にふれる僅かな、ほんの僅かな一点であった。

昭和二十年八月九日、原爆は投下され、多くの人命を失い、更に多くの傷害者を残した。平和祈念像の右手は天に向けられ原爆を、左手は水平に平和を、軽くとじられた眼は死者の冥福を祈るという。残された疑問点二つ。「あの肩かけって何を意味してるのかしら」。「こいつはいったい男なのかい、女なのかい、ええ?」

長崎の夜景は同じだが、その見方はいろいろ違う。三百円足らずで矢太楼とかの温泉でぬくしかはあれ

若き日のわれの希望と
二十年の月日と　友と
われをおきていづちゆきけむ
そのかみの思はれ人と
ゆく春のこの曇り日や
われひとり齢かたむき
はるばると旅をまた来つ
村により四方をし眺む
火の国の大阿蘇の山
駒あそぶ高原の牧
名もかなし岬千里浜

（三好　達治）

岬千里浜

われ嘗てこの国を旅せしことあり
昧爽のこの山上に　われ嘗て立ちしことあり
火の国の大阿蘇の山
裾野には青岬しげり
尾上には煙なびかふ　山の姿は
そのかみの日にもかはらず
環なす外輪山は
今日もかも
思ひ出の麓にかげらふ
うつつなき眺めなるかな

原爆の街、長崎（第四日）

夜景は復興したが……

外国貿易船々首飾木像（松浦資料博物館）

弓張岳は美しい。第四日の旅程は弓張岳から始まった。まろやかな緑の絨毯にレンガ造りに似せたしゃれた展望台の朱が映えてお伽の国の気分に誘う。中天に近づいた太陽は暖かなやわらかい手を地上に触れている。近景に大小さまざまの九十九島を配し、海は空を映して青い。ここで写真撮影が花咲いた。黒い学生服もよく緑に対照してここでは色彩美がよく強調される。しかし、春愁っていうのかな、美しい、でも何だかさみしい弓張岳。

弓張岳の印象は大浦湾のイメージにそのままつながる。バスは白い舗装路を軽くターンしてそのたび大浦湾の姿がフィルムのように回転する。海の青さの際まで深緑の森がせり出して風光明眉と呼ばれる色とただすまいだ。バスの窓外にはミカンの木が果実をキラキラと輝かせて連なっている。ぼくらはしばし風景に酔った。バスは風を切る。

西海橋のたもとで昼食を取ったので、十円払って有料道路に入ってみた。遠景から見るとチャチな趣味の悪い色と感じた西海橋も、真近に観察するとやはり現実的な色彩をしっかりと備えている。鉄の橋桁はふてぶてしい大きさをもって水底に足をふんまえている。よし、それでこそ橋だと思ってそのおばしまにそおっと手を置いてみた。

美しいばかりの西海の味などはない。バスはたすら長崎に向った。長崎は坂の多い、異国情緒と原爆の街だという。

偽善者の顔つきで座りつづける平和祈念像には何にも感じなかったものの、国際文化会館にはさすがに長崎の原爆の惨劇が残されていた。くにゃりと歪んだガラスビン。止まった時計。そしてそれを最も如実に語る写真群。治療を受ける患者の皮膚はただれ、ペロリとはげ落ち、筋肉はわずかに骨にまつわりついている。骨さえも屈曲し、それはもう人間の体ではない。醜い。全く醜い。そう思ってなおじっと写真を見つめていると腹の底から哀しみとも怒りとも知れぬものがこみあげてきた。この戦いは人間と何との戦いなのか。これらの人々の苦しみ。またその傷跡を見つめている人々の悲しみは何に対する苦しみ、悲しみであろうか。この夏読んだヒロシマノートの一節が頭に浮んでくる。

「天地の死塊となりて生きものみな滅びなば慰むものを。高橋武夫」。

長崎は廃墟なのだ。すでに二十年前のあの惨劇をおしかくしてしまったかに見える。文化会館を一歩出ると、長崎には原爆の傷跡もなく平穏無事にこの数百年来を過して来たかのようだ。ぼくはふと墓地を思った。長崎全体が一つの墓地なのではないか。人々は生きながら屍となって今はあの過去の惨劇をひそかに埋めてしまっているのではないか。ギリシャの廃墟と、長崎と寂しい墓地のイメージが重なった時、背すじを恐しいものがすーっと走った。

夜、展望台まで行く。何とも言えない寒さの黒い風が乱舞している。長崎の夜景は美事だ。黒い毛織の布地の上に夢色の宝石をちりばめて平野を埋めつくしている。体が冷え冷えとする。復興した街だ。その鮮かさに驚異を知った。しかしこの日までには幾多の悲しい物語がこの夜景の栄える街に織られたことであろう。幾多の苦しみ嘆く人が死に、幾多の苦しみ嘆く人がなお生きつづけ、この再建につくして来たか。夜景は何も語りはしなかった。この街にその思い出はすでに過去のものだったのだろうか。

＜第五日＞

船は長崎港内をめぐって、名所案内をやる。船の覆いごしに昨日行ったグラバー邸を望むと長崎の異国情緒がしみじみ心に残った。遺跡は恰も化石のようだ。家々の間を埋める石畳の模様。赤いレンガ造りのさびれた建物。チョコレート色の放射状の屋根。長崎は異国情緒という名においては決して失望を与えない街なのである。

後髪をひかれる思いで長崎を去り、仁田峠を過ぎバスは島原に入る。ガイドさんに教えて頂いた島原の子守歌のメロディは哀切の情を湧かさずにはいられない。美しい年頃の娘は人買いに売られ異国に連れ去られる。まだ幼い娘は貧困のゆえに子守に出され、つらいしうちに泣きながら、連れ去られた姉を慕うのである。この子守歌はそうした嘆きの中で島原地方に歌いつづけられて来たものだという。

バスは島原から船に乗って三角に渡った。後は今夜の宿、熊本に向って進むばかりである。　（K）

レジャース

▼大浦天主堂でのお話。長い階段を上って行くと美しい女神が我々をむかえてくれる。軽くあわせた両手、かすかに湛えた微笑。某君曰く「ああ、彼女にそっくりだ…。」スウズウしいね。

▼これも又、大浦天主堂でのお話。白い立札を前に、五、六人の男の子たちが記念撮影。これだけなら何の変哲もない光景だが…。立札をよく見ると"柵内に入る事禁ず！"どっかしてるね、ホント。

▼弓張岳（佐世保）で奇妙な高校生出現。どこか見たような顔だと思ったら何と、直さん（山本先生）。三十年の昔（いや五十年かな）を忍ぼうたって一寸無理だよ。

▼"おどみゃあたんばそうにゃしいちょる"バスガイドさんが伝達遊びで出した問題。意味もわからず一生懸命伝えたのだが…。島原地方の方言で、「儂やあおまんをまっこと愛しちゅう」という意味だとか。女子との境にいたもの怨まれることしきり。

▼大宰府天満宮での話。勉学の神様だとかで一寸真剣なおもちゃ。来年度の大学受験のお守りでも買おうと思って行くと、「このお守りは一年しか効果がありません。」とか。どうだい、こりゃあ。近ごろの神さまもせちがらくなったもんだね。一度失敗したらもう一度新しいのを買いなさいってさ。

校友の店
クツの　高雅堂
高知市帯屋町一丁目　TEL ② 2960

イリキ眼鏡店
高知ハリマヤ町 電②0998番

新築落成に、ご婚礼用、ご出産用に祝餅、赤飯、饅頭
老舗
中納言
本店　大橋通り　②0573 ③2490
潮江店　天神町　②2979

古本誠実買入
井上書店
高知市帯屋町中の橋通り
TEL ③ 3931

STEREO
レコードなら
なんでも揃います。
☆土佐高生は優待致しております
ポピュラーからクラシックまで!!
中の橋電停
南入二軒
電③－1082 イロハニ
レコードの店　エリートへどうぞ！

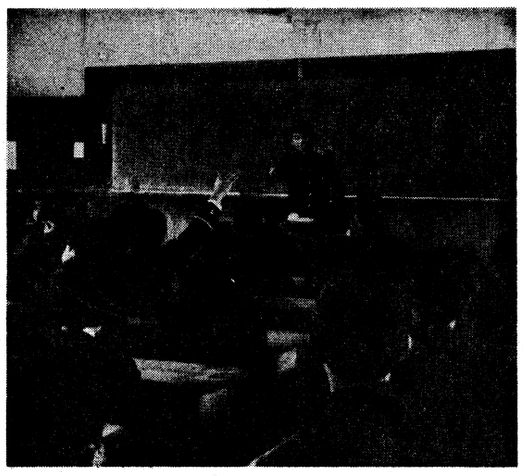
土佐塾もこの春創立七周年を迎えます！
母校へ既に400名、5人に1人は土佐塾出身です！
みなさまのお蔭です、本当に有難うございました。しかしながら私学の前途は楽観を許しません。
今こそ総力を結集して母校の発展を計りましょう。少しでもお役に立てばと願っています。
小4～中3 中浪　塾生集中
優秀な後輩をお世話下さい！土佐中生の補習教育にも御利用下さい！
最高の合格率　最大の合格数
塾長　福島 清三（29回早大法卒）
教頭　中原 章夫（広島高師卒）
進学主任　武中 正雄（30回早大政経卒）
土佐塾
高知市宝永町67 電停北100メートル 電③0729

運動会に
折り詰めを！
定評あるうまさ
新店舗
寿し柳
TEL ② 0105・0106
南ハリマヤ町四銀南

考えよう！H.R問題を

最近、H・Rの下活潑さが問題になっている。原因には生徒の無関心、先生の不参加などが上げられるだろう。私たちはこれにどう対処すればいいだろうか。

また今日のL・Hもレクリエーションである。私たちは、こんなことでいいのだろうか。もっと、この時間を有効に、そして楽しくすごさなければいけないのでは……。そう考えた新聞部では、このH・R問題をとりあげてみました。【写真説明】久々に意見の多い話し合い



H・Rの目的は……

悪循環

ある日のホーム・ルーム。S君のクラスでは〝H・Rとは何か〟という話し合いをした。意見も出ないまま五十分が過ぎた。その時には言えなかったが、S君は休み時間に友人のT君とH・Rについて議論をはじめた。

T　H・Rとは、クラスの親睦をはかるためのものだ。別に〝H・Rとは何か〟なんてしゃちこばってやる必要はないよ。

S　それなら君は、今のようにH・Rが遊びばかりでいい、というのか。

T　それでいいと思うよ。それによってクラスの親睦がはかられて行くのなら、文句はないじゃないか。

S　だけど、現実にそれができているのか。男子がソフト、女子がバレー…なんてクラスが多いけど、あれでいいのかなあ。それにその遊びなりスポーツなりが好きなやつはいいけど、きらいなやつはどんどん離れて行く。これじゃ君の言う〝クラスの親睦〟なんてものさえ、やれやしないよ。

T　それなら、君はどうしろっていうんだ。

S　もっと話し合いをやって、他人の考えを知って行く。そうすれば、だんだんクラスの和なんていうものができて行くと思う。それに、中学の場合には一応〝道徳〟なんていうものもあることだしもっと利用すべきだと思う。

T　でも話し合いをするとしても、クラスの親睦ができていなかったら、今日みたいに意見もなにも出ずに終わってしまうんじゃないかな。

S　そうか……。

先の話を聞いてみると、一つの悪循環が見られる。話し合いをしないから、親睦がはかることができない。といって、親しくなければ話し合いはできない……。

H・R＝息抜き？

このH・Rというものを、一般生徒はどう見ているのだろうか。高一H君はこう言う。「H・Rは、現在はその〝特殊性〟が生かされていないよ。簡単に言えば、H・Rなんて、休み時間の大きいもの……ぐらいにしか考えていない。中学の頃から〝H・Rとは楽しく遊ぶものだ〟なんて思ってたんだからね。急に考えを変えちったってちょとムリだよ。中学の頃には先生も〝何をして遊ぼう〟なんて調子だもの。正に息抜きだなあ。」多数の者はそう考えているのである。

それに対しK君は言う。「H・Rというものを考え直してみようという心が皆にはおこらないのだろうか。もし、今のままの状態で来年度も続けるんなら、こんな時間など不要だ。でも、利用するとしたら効用は大きいと思うけどなあ。クラス全体の皆の意見交換。もちろんレクリエーションも…。それにクラスのことについての話し合いなんかをやれば有効だよ。それを今みたいに〝息抜き〟なんて考えちゃあ……。」

H君は〝週に一時間ぐらいは息抜きの時間があってもよいのではないか〟という意見。K君は〝H・Rというものの本当の意味をもってよく考えてみよう。そして有効に使おう〟という意見だ。

ところで、ここで大きな問題が出て来る。すなわち「H・Rとは何の目的で設置されたのか。」ということだ。

生徒から盛り上げよう

改革の雰囲気を

先生と生徒の接触の場

H・Rの目的について、校長先生はこう言う。「H・Rとは、普段、人間的に接する機会のない先生と生徒の接触という役目を果すものだ。人間教育というものは特別に週に一時間ぐらいやったところでできるものではない。それは常日頃の授業の時に合わせてやっておくべきことだ。ただ、H・Rとはその際に必要な、先生と生徒との心のつながりを深める助けをするものだ、もちろん他にも目的はあるが、これが一番大きいものだと思う。決して親睦のためだけのものではない。」

学校側はこういう立場をとっているわけである。

学校側の立場ははっきりしたが実際に学校側は、これに即したことをしているのだろうか。答は「ノー」である。三・四年前には、学校側がH・Rを指導しようとしたこともあった。だが、最近は一向にその様子が見られなく、H・Rは各ホームの主任にまかされている。ところが、そのホーム主任は積極的にH・Rに飛びこんで行こうとしていない。そのため、運営は生徒の手に委ねられている。

校長先生は「今年はもう残り少ないので、来年度はなんとか考えてみたい」とおっしゃっている。だが具体策がない。なるべく早く具体策その他を出していただきたいものである。

学校と生徒が協力して

ところで、各ホームのH・Rに対して、熟行部では「H・R運営委員会設置小委員会を作ろうとした。しかし、これは否決され、やむを得ず、「H・R運営委員会設置委員会」として発足した。しかし、その際に話し合ったところ委員の大部分は「別に、今のH・Rを改革しなければいけないとは思わない」ということで、この委員会も暗礁に乗り上げた格好になっている。

このことが表わしているように現在、生徒側からも〝H・R改革〟という動きは出ていない。それのみならず動く様子も見せていない。このままではH・Rはその存在価値を失うばかりである。

設置委員であるU君はこう言っている。「いくら一部の者が動いてみても、他の者が無関心では何もできない。現在、H・R活動が全体的に不活発なのは、我々生徒の責任なんだ。生徒側が動き出せば当然、学校側も動かざるを得なくなる。それでこそ、H・R活動が活発になるだろう。」また、それとともに、「ただ、学校も何か具体案を示してほしい。そうすれば、生徒側も関心をもってくるだろう。」という。H・Rの活発化はどちらか一方がやってもだめだ。学校側と生徒側とが協力してこそ、はじめて成立つものだ。という意見で、H・R改革論者はほとんどこれと同じ意見を持っている。

具体策を持って…

とにかく、H・Rと言えば、生徒間の、そして先生と生徒の間の心の交流の場である。我々はそれを再認識して、協力してH・Rを発展の方向へ持って行かなければならない。

H・Rを改革するといっても、それには具体策が必要である。現在、かなりのクラスがH・Rを運営委員を選出していて、それを中心に運営している。また、クラスで文集を作ろうとしているクラス、誕生日に寄せ書きを贈っているクラス。放課ホームの時に歌を唄っているクラスも見られる。

最後に高一I君のことばを紹介しておこう。「H・Rを活発にするのには、具体策が必要だ。しかし、具体策がいくら出ても、生徒にやる気がなければ何にもならない。せっかくL・Hの時間が設けられているんだ。皆で協力して、これを価値あるものにしようではないか。また、ホーム主任の先生方も、もっとそちらから僕達の方へ飛び込んできて、よきアドバイサーになってほしい。」

外野席

自分なりに

エレキを楽しもう

バカ騒ぎだけは……

今やエレキ・ブームだとか。帯屋町を通っていても両側のレコード店から、例の〝テケテケテケテケ……〟(?)という音が飛び出して来る。

さて、このエレキ・ブームに対し他府県では、エレキ・バンドに会場を貸さない、とかいう問題が出てきているとか。なんでも〝エレキ自体はともかくとして、そのまわりで踊りさわぐ様子がナゲカワシイ〟とか、お偉がたがおっしゃったそうだ。

たしかに、どう見てもマトモな雰囲気ではない。良く言えば〝若いエネルギーを、おもいきり発散させている〟悪く言えば〝理性を失ったバカ騒ぎ〟……。

新聞紙上にも〝エレキ論争〟がまきおこった。「今の若い者はエネルギーを発散させる場所を、もっと有意義な事に求めることができないのか？」「エレキ自体は悪くはない。だが、まわりでバカ騒ぎをするなどもってのほかだ。人に迷惑がかからない所ならともかく、まわりに人家のある所でキャーキャー騒ぐなど……。」「皆さん、私たち若い者には、もっとやらなければならない事があるはずです。エレキなどというつをぬかしている間に、何か考え、人のためになることをやっていれば、もっともっとこの世は住みやすく、楽しくなるはずです。」なんていうエレキ反対論。「受験・受験で追われている現在、エレキはいいウサバラシになる。」「私たちの若いエネルギーを発散させる場に他にしてもモンキー・ダンスが出て来る。やがて……喫煙、飲酒…という風になるのが多いという。しかも、それが中学生や高校生が主だそうだ。一人では何にもできない者でも、リズムの中で開放感があり、仲間も多いということになるとやはり自制を失う事になるのだろう。

最近、これと正反対の話を聞いた。福井県だか富山県だか知らないが全国でも有数の技術を持つアマチュアのエレキ・バンドの演奏会である。その会場に集まった人約千五百人。ほかの所ならばワイワイキャーキャー騒ぐとこだが、ここでは、一曲演奏が終わるごとに静かに拍手が起こり、演奏がはじまると、リズムに体を合わせる人はいても、声はほとんど立てずに演奏を聞くというような光景が見られたそうだ。エレキを〝音楽〟として、まじめな態度で演奏を聞く……なるほど、エレキにもこんな聞き方があったのか……僕はそう思った。

皆さん、どう思いますか。

エレキは別に悪い物ではないと思います。でも、それで調子に乗って、間違いをしでかせば自分の害になるのです。

自分なりに聞いて…いや、自分でもどんどん弾いて、エレキを楽しんで下さい。（S・O）

文化祭はどうなる

今年の文化祭　決定まで

今年の文化祭に対して、熟行部は、まず「文化祭小委員会」を組織。そして〝何とか現在のマンネリを打破しよう〟と、二つの案を生徒側に示した。それは①芸能発表会を中央公民館で開き、外部の人の観覧を認める。また、その場合、あく体育館は展示の会場として利用する。②芸能発表会に一般生徒の参加を認めてバラエティーに富んだものにし、また、それにより生徒の関心を高める、という二つである。

① 芸能発表会開催場所

体育館	公民館
401	187

② 一般生徒参加について

賛成	反対
551	85

③ 文化祭はマンネリ化しているか

している	していない
391	103

小委員はまず学校側に①の項目を許可してほしい、と申し入れたが、学校は〝前は中央公民館で開いていたが、会場を体育館に移した時、もう公民館ではやらない、という約束をかわしている〟という理由のもとにはねつけた。

小委員会としては、ここで生徒にアンケートをとって、先に掲げた両案に対する賛否を求めた。結果は別表を見ていただきたい。

この結果を見て気が付くことは意外に中央公民館で芸能発表会を開きたい、という人が少ないことである。アンケートの中から反対論者の意見を拾って見よう。「芸能発表会の場所を変えるぐらいで文化祭のマンネリ化を防げるのなら、現在のままでもそれはできるはずだ。簡単に言えば経費のムダだ。もっと一般生徒に〝自分たちの文化祭だ〟という意識を芽ばえさせることこそ必要だ。」このような意見が、このアンケートの中にも多数見られる。

小委員会の方は「経費はそれほど多くはかからない。それよりも外部に公開することによって芸能発表をする部も、今よりやる気を出して面白い舞台を見せてくれるだろう……。」という。

とにかく、支持者が少ないので①を学校側と再び交渉するのは不可能になり、この案を引っ込め、②案を学校側に要求。学校側は職員会議を開いた上で、この申し入れを認めない、という態度をとったわけである（理由その他は一面参照）。

文化祭とは何か…

今年の文化祭についてのいきさつは以上である。

ここで考えなければならないのは〝文化祭とは何であるか。何を目的としているのか〟ということである。

学校側は「文化祭とは、普段発表する機会のない文化部に、年に一度、一年間の活動の成果を発表させる場である」といっている。

ここでC君は疑問を投げかける。「はたして、今の文化祭に一日の日を取る必要があるだろうか。現在、文化祭に出場している部の中には、文化祭直前になってからあたふたと準備を始めるところがある……というよりも多い。これでは〝一年間の活動の成果を発表する〟という、うたい文句にはずれているではないか。こんな調子ならば強制観覧にするなどムダではないか。」簡単に言えば、なりに普段の活動を活発にやっていればいいんだ。文化部の活動はわかりにくい……なんていうのは逃げ口上にすぎない。まじめにやっていれば必ず一般生徒も感じるはずだ。」

将来の発展を

生徒から強い希望を

一般生徒は……

一般生徒に文化祭についての意見を聞くと「全く、我々に関係ないような感じがする。」「今の文化祭は、たしかにマンネリだ。だがマンネリですましていてはいけない。それには、我々生徒から強く要望を出さなくてはだめだ。」「熟行部の活動はなまぬる い。もっと部を引っ張っていく、という意気でやってほしい。」「文化祭に参加できる部を、もっとふやしてほしい。」「いま、芸能発表会に参加している部は、温室育ちぎみになっている。小委員会は、内容、意欲などを考えに入れて、もっと厳選すべきだ。」といろいろ見られた。

文化祭に関係がある人は、まわりの人に意見を聞き、もう少し考え直す必要がありそうだ。

文化祭を前向きの姿勢に

今年の文化祭は結局、今まで通りやることになったが、将来の文化祭はどうなるのであろうか。

職員の間には、規模は変えずに二年に一回開こう、という意見も出ているという。O君は「規模を大きくするのならともかく、規模はそのままで、二年に一度など、もってのほかだ。それならやめた方がましだ。」といっている。

とにかく、今のままでは文化祭が衰退の一途をたどることはあきらかである。本校で唯一の文化的な催し物である文化祭がなくなったらどうなるであろうか。

今年度はもうムリにしても、来年度からは何か対策を考え、文化祭をもっと前向きの姿勢にしなければならない。

おとしものはどこへ

金銭四十一件で最高

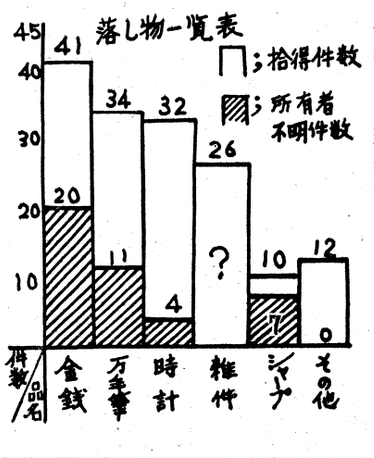
「運動会の時に忘れていたらしいが七千百余円入りのハンドバッグがあがってきている。心当りの人は……。」とか「遠足で××を紛失した生徒が……。」などと朝のホーム・ルームの時間に拾得物についての話がときどきでてくる。そんな事からか〝土佐高生は物を大切にしない〟などという風評がどこからともなく、流れてくる。そこで現在の拾得物の状況はどうであるか、調査してみた。

四月から十一月までの拾得物の一覧表を整理した。（表参照）これによると拾得総件数は百五十五。金銭の拾得件数が四十一件で最高。金額にして、なんと二万二千七百六十一円。このうち所有者不明二十件・四千百六十九円。一件での最高額は七千百二十五円、そして三千五百円、千四百円となっている。

次に万年筆三十四本（所有者不明十一本）、時計三十二個（同四個）雑件二十六（体操ボウ、フクETC）シャープペン十本（同七本）と続いている。その他傘、ハンドバッグ、洋服、スカート、メガネ、カメラ、ラジオ、風呂敷などきまざまである。

最近はよく取りにくるようになった

ブルジョワ階級の土佐高生にも不況がヒシヒシと感じられるのか、拾得係の北村先生は「最近、落し主は良く取りに来るようになった。『おとしました』と届けがあっても、その落し物があがってきていない事のほうが多いくらいだ。」と言っている。運動会の時の紛失物には全部持主があったそうだ。しかしこの時も拾得物としてあがっていないのも多かったという。そんなものはどこへ？やはり道は一つ。誰かさんのポケットの中らしい。現に高三生十名余りが運動会のあとの落し物を捜したところ八百余円あったとかいってその金は彼等の宴会費使用にわれたとか。



珍現象？一枚の紙幣に二人の持主

また、不況も深刻になってくると珍現象？が起こるものであるが……。ある日一枚の百円紙幣に時、場所をだいたい同じくして紛失したという二人の持主が現われるという珍妙な出来事があったという。これには一人五十円ずつ分配するという、北村先生の大岡裁きによって無事解決したということだ。

昔は即売会を今は保管

ところで持主のなかったものはどのように処分しているかというと、三十三年までは展示即売会を開いて処分していたそうだ。しかしこれは、学校などでの落し物は学校が一時保管していて、持主が現われない場合には警察へ届けなければならないそうで、大びらにやれないし、拾得品を生徒に販売するということで「生徒に変な気持を持たせる。」という即売会に反対する声が先生の間にあって、以後行なわれていない。それからは博愛園へ寄付（二回）したりしていたが現在はそれもやめて雑件以外の貴重品はそのまま北村先生のところへ保存している。また、お金の方は学校長の名の下に保管（貯金）しているそうだ。

北村先生は持主のない拾得物についてはなんらかの形一即売会などーで処分したいと言っている。（H・N）

こえ

上バキはいつも清潔に

私がこの学校にはいってきて一番いやな感じだったのは上級生（男子）がうわばきのうしろをふんでいたこと。それもきれいなうわばきならまだいいが、真黒なうわばきだったこと。そういうことを多くの人が平気でやっているのでおどろいた。ふむほど小さくなったのなら買ったらいいのに。それから上ばきはいつも清潔にということを上級生は気をつけて下さい。（中一Y・Y）

これが実力テスト？

僕は最近の実力テストというものに矛盾を感じている。それは補習でならった事を実力テストの範囲として出題していることである。なるほど補習に出席している者にとっては〝うれしい〟話だが、僕達のようにクラブ活動を毎日やっているものはどうなるだろうか。実力テストの一週間か二週間前から、補習に参加していた友達のノートやテストを写して、試験にのぞむ。でも、補習に出席している人はクラスでも少数の人なのだ。だから一人の人に何人もの人が貸してくれと殺到した時にはテストの二ー三日前まで写せないことがある。（僕もその一人だった。）このような状態でテストを受けて、これが公平な実力テストだといえるのだろうか。

この教科担当の某先生は「一年の間は○△をみっちりやって実力をつける。その為に君達に範囲を定めて、勉強させる。」とか言っているそうだが、僕には合点がいかない。そういう方針で補習をやっているのだったら、当然出席してなかったものについては解答を渡すべきではないだろうか。考えようによっては補習に強制的に参加させる卑劣な方法であるといってもいいすぎではないと思う。

実力テストの成績は進学の時の参考にするかいうことだそうだから、公平な実力テストであってほしい。（高一・N）

売店・食堂での割込みに思う

ぼくは中学一年の生徒です。ぼくたちのクラスでは弁当を持って来る人が半分くらいしかいません。あとの人はパンやうどんで、すましてしまう人たちです。ぼくは弁当をもってきますが。たまたまうどんやパンのときもあります。そのときは、いつも台風のようないきおいでパン売り場や食堂にさっとうする友だちのまねをしなければなりません。そしてせっかくならんだところにわりこみしてくる人がいてなかなか番がまわってきません。わりこみのしかたは後からゆうゆうときた人たちが前にならんでいる友だちにたのむのです。それもどうどと大きな顔をして！こういうことはやめてください。又せまい食堂に弁当持参でくる人がいますがこれもやめてほしいです。これくらいのことは中学生にもなってまもれるとおもっていましたが案外まもれていないようです。小さいことですが守ってほしいと思います。（中一R・F）

暖房完備
本と万年筆　明文堂
本店　ニューコーチビル西端
TEL　②　6395③6959
支店　大丸デパート西口前

栄養豊富　軽食におやつに
マンソート
カレー焼き
梅ケ辻電停前

ヒフ病薬　新薬は
はりまや薬局
はりまや橋四国銀行本店前　TEL②2665

あらゆる　スポーツ用品の
株式会社　広松運動具店
■営業所　高知市本町一一四　■電話③代表6151

サンゴはぜいたく品ではありません
りっぱな工芸品です
土佐の名産サンゴにカツオと
全国に知られています
土佐名産サンゴと
装身具は
池田珊瑚店
高知市帯屋町一丁目
TEL　②0358

信用あるお店で安心したお西物を
通学用・旅行用・かばん・袋物
マエダ
かばん店
高知市帯屋町18　電話②8600・8601

音楽愛好家の皆様の店
クラシカルレコード専門店
楽聖
各種レコードを豊富に取揃え、皆様のおいでをお待ち申し上げて居ります
三条通電停化三軒目　TEL　③—1009

土佐高の店
白亜堂の万年筆で
白亜堂
勉学を
帯屋町東宝劇場西三軒
TEL　②2473

新聞部
部員募集
特に中三の人を

愛国心とは何だ！

写真は一九六〇年のハガチー事件。ここにも愛国心というもののある一面が表われてきている。

広い視野に立とう
ゴメンだ国家的エゴイズム

愛国心とは自分の国を愛し、その発展を願い、これに奉仕しようとする態度である。ところが、「戦後日本の重大な欠陥の一つは、若い人たちに祖国とその伝統に対する関心や愛情が弱まってきたことだ。」と「期待される人間像」草案作成委員の森戸辰男氏はその講演記録の中で述べている。つまり「分極化する国際関係のもとではどこの国でも自分の国の領土やその伝統を大事にしたいという強い意欲が若人の間に盛んであるのに日本の若者はどうも……。」というのである。

はたしてそれは事実なのだろうか。またその場合、国を愛するとはいったいどんなことをさすのか。そして我々はどう考え、どう行動すべきなのか。

これについて本校生の話、社会科の先生の話、政党での話、岩波新書「愛国心」（清水幾太郎著）等をもとにして考えてみよう。

――（N・U）

☆……愛国心のタイプ……☆

まず愛国心ということについてどんな感想がもたれているか、考えられるタイプを「愛国心」の中から拾っていくつか掲げてみたい。

（A）愛国心という言葉を聞くと、涙がこぼれそうになる。強国であった過去の日本と領土のみか戦争権さえ失ってしまった憐れな現在の日本とを比べれば、正直のところ誰だって絶望するではないか。

（B）戦後の道徳的頽廃はひどいものだ。ことに現代では相寄って日本という全体を形造っているはずの沢山の集団が、その集団の利己心のままに行動しているではないか。これでは、一つの国としてのまとまりが何処にも見られない。現在の日本人は愛国心というものを持っていないのだろうか。

（C）愛国心ほど大切なものはない。自分も愛国の至情において人後に落ちないと信じているが、しかし何が愛国的なのか、どうしたら愛国的になれるのか、それが明らかでないのだ。

（D）愛国心などという言葉は絶対に口にしないでもらいたい。今日まで愛国心という名のもとにどれだけの圧制、残虐、犯罪が行なわれてきたことだろうか。誰かが自分の行動や思想は、愛国の熱情によるものだと主張する場合、彼はいっさいの反対者を非国民に見立て、国賊と見立てているわけだ。そうなったら批判も反対も不可能になる。つまり愛国心という言葉は殺し文句だ。二度とこんな言葉にお目にかかりたくない。

（E）もう愛国心などを云々する時代ではない。愛国心というような狭い気持は過去のもの、一昔前のもので、今日は、すでに国際主義あるいは世界主義の時代ではないだろうか。民主々義と愛国心は縁のない二つの観念と見るべきではないだろうか。

（F）自分は目下のところ愛国心について何も考えていない。今はただ、自分のことしか考えられない。誰でもそうではないだろうか。国や民族のことより自分の身の上だけを思いわずらっている、それでよいと思う。

おそらくどれにもあてはまらない人もいることであろうが、記者が調査してみて考えたところによると、やはり（F）の型が一番多いような印象を受けた。それは何故か。

☆……プライド持たせぬ現代日本……☆

「昔、少なくとも太平洋戦争が終わるまでは、男の生きがいといえば、国家のためにつくすということだった。」と戦中派のT氏（医師・四十才・本校父兄）は語りはじめる。教育のせいかもしれないが誰もが〝国のため〟ということにほこりを持っていたし（もちろん忠君愛国という弊害をともなってはいたが）矛盾もそう感じなかったように思う。それが敗戦となったとたん、事実ガタガタとくずれ去ってしまった。いったいあれは何だったのだろう。」

いかにも自分の属する国が、真に独立している時、その上戦前の日本のごとく、力という背景をもっている時、国民が誇りをもって国の発展のために奉仕しようとするのは当然であろう。しかし国内に米軍基地があふれ、国際政治の上でも、ほぼアメリカ追随の外交を続けている現在の日本に、誰が明るい健全な夢を託せるというのだろうか。ここで、自民党高知県連のX氏は反論する。「日本はアメリカの言いなりになってなんかいないですよ。ちゃんと主張すべきところは主張してます。」

――では、国内に米軍基地が二百五十ケ所もあるということについては、どうお考えですか。

「結局、あれは国土をアメリカに守ってもらってるんだ。今日本独自の軍事力を持つということは政治の過程として損だからね。だから、安保条約というのは、日本国民に非常な恩恵を与えているわけですよ。現在、日本は自由陣営に属しているから米国に守ってもらってるわけだけど、これが社会党あたりの政権だったら、おそらくソ連がきてたでしょうね。実際そうして守ってもらえば国家的に得なんだから……。」

――国家的に得とは？

「もちろん国民全体の利益になるということです。」しかし、それではあまりにもすべる、プライドのない国家のあり方とは言えないか。再び、T氏「むろんいいことではないが、何といっても現実世界を動かすものは力より他にない。中、ソ、米などという大国が強大な力を振り回して（彼等は誇りをもって）世界的に対立している現在、日本みたいな弱小国は、その中でするく立ち回る以外にないわけですよ。もうどうしようもない悲劇ですね。その中で、日本が再び戦争に巻きこまれることへの危惧、これが私の愛国心とでもいえようか。」それにしても何とも悲しい、非建設的な愛国心ではないか。眼前に強大な力を背景とする他国の愛国心を感じる時、よけいに日本が情なくなり、またいまだにそういう、力の支配する原始的な世界というものに憎しみさえ覚えるのは私だけだろうか。

☆……生死にかかわる愛国心……☆

こういう意見もある。（D）のタイプに近いが、本校生U君（高一）の声を聞いてみよう。「A国が他国と戦争したと仮定する。A国民は一致協力して敵に向わねば戦いに勝てまい。仮にその時、ここにA国の将来を真剣に考えた末での戦争反対論者がいたとする。そして、大っぴらに反戦を訴えたとする。彼はどうなるか。今までの歴史から考えて、まず監獄行きは免れまい。場合によっては死刑にさえされるかもしれない。しかし、いったいどこに、誰に彼を殺す権利があるというのか。むろんA国が危い」という形で国を愛した人も認めよう。しかし彼の愛国心が絶対ではない。彼と反対の立場の「愛国心」を抹殺する権利ももっていないはずだ。どちらも国を愛していながら、その一方が死なねばならない。これは、愛国心というものが存在するから、このような悲劇が生まれるということにはならないか。我々は愛国心そのものを毒だとして、否定しなければならない。」ここで、愛国心は生死にかかわる問題となってくる。しかし「もし愛国心がなかったらどうだろう。我々はもっと愛国心のいい面を考えるべきだ。」と、K先生等は言う。「戦争、国家の危機というのは、すなわち個人の危機ですよ。国民の99%までが必死で戦っていたあの戦争中、いくら主義が違うからといって、戦争に協力もせず高見の見物をしてた人を僕は愛国の人とは呼びたくないですね。むろん徹底的に反戦運動をやった人達はある意味で尊敬できなくもないが……。」

☆……真に国を愛するとは？……☆

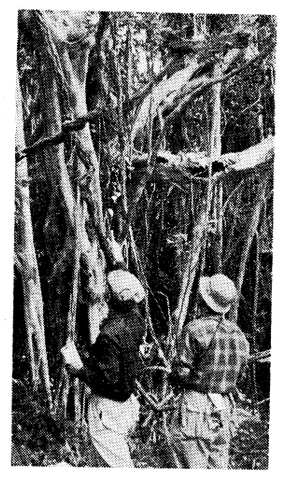
それに対し「戦中、戦後を通じて一番国を愛し、祖国を愛するのは共産党です。だから国を滅ぼす侵略戦争に反対し続けたのです。私達は祖国防衛戦争以外のものを認めませんからね。」と共産党高知支部のY氏は目を輝かせて熱っぽく説く。彼も国を愛しているようだ。そこで、

――祖国防衛戦争とは？

「ファシズムに対する連合軍、それにベトコン等です。つまり社会主義国のする戦争と資本主義、ファシスト等のやる戦争とは本質的に違うということですね。」

アーア、彼等も愛国心を独占しているではないか。自民党の人にしてもそうだった。自分こそ国を愛していると主張する人はみんなそうだ。みんな国を愛していながら、その主張するところはてんでバラバラ。いったい真の愛国心なんてものはあるのだろうか。あるとすれば、それはどんなものなのか――。

ここで、はじめの森戸氏の意見「現代の日本の若者には、愛国心がない」ということについて考えてみよう。我々高校生は、本当に愛国心をもっていないのか。いやそんなことはないはずだ。我々はただ〝殺人〟をも辞さない「愛国心」という名のエゴイズム、言いかえれば作為的、あるいは陶酔的な愛国心はゴメンだというのであって、健全な愛国心をもちたいだけなのだ。健全な愛国心なるものの基準、それはあきらかでないが、ただ言えることは世界平和につながるものであるということ。つまり真のヒューマニズムに立脚していなければならないということだろう。だから、日本だけはとか、自国と同じイデオロギーの国家群だけはなどという、狭い視野を捨てねばなるまい。（これは自分の国のプライドを捨てるということではない。）そして、そのためには個人のエゴイズムや、また「土佐校だけは」などという小さい所の否定から始めねばならないだろう。



【写真説明】　ガジュマルのもとにたたずむ先生

カッパ先生屋久島へ
トロッコの屋根で口笛

紀行文　山中三男先生

あこがれの島だった

屋久島は私にとって久しく憧れの地であった。鹿児島から南西へ九十余マイル距ったこの南海の孤島は、全島が山で充ち、その最高峰「宮ノ浦岳」は一九三五米の高さをもつ。その上、海岸には亜熱帯性の植物が繁茂し、山頂付近には、寒帯性の高山植物が分布している。山と植物に興味をもつ者なら、一度は訪ねてみたいところである。ことに私は今年の夏、北海道利尻島の利尻岳（一七一八米）に登った時から、一層南の屋久島に注目するようになった。

機会は意外に早くやってきた。東北大学の生物学教室の人達が、屋久島の植物調査に出かけるのに同行させてもらうことになったのである。

一九六五年十月十五日の朝「藤丸」は定刻通り八時に鹿児島港の埠頭を離れ、午後三時無事に安房に上陸した。

繁茂する亜熱帯植物

翌日の午後、私達は安房川の上流にある小杉谷事務所まで材木運搬用のトロリーで運ばれた。三台つながったトロッコが、ガソリン機関車に引っぱられて、安房川の左岸を縫って上ってゆく。まず私達をおどろかせたのは、樹木の繁茂ぶりと、亜熱帯性のシダ、ヘゴとリュウビンタイがいたるところに見られることだった。これを見ただけでも屋久島に来たかいがあった。

万能？の営林署

小杉谷は海抜六五〇米、夕方になるとさすがに肌寒くなる。私達は営林署の小杉谷寮に入った。全く屋久島は営林署万能といった感じで、夕食後寮の宿泊者名簿を、つれづれに繰ってみたところ、ずいぶんいろんな人達が利用している。中には旅行目的のところに「新婚旅行」と書いてあるものまであった。

翌日は、小杉谷付近の採集と調査。屋久島の名を有名にした屋久杉の林には、千年二千年を経過しているといわれる古木が密生し、日本本土では稀にしか見ることのできないユノミネシダが、ここでは路傍に雑草のように生育していた。

やはり島にいるのだ…

翌朝は見事な天気だった。寛吾さんと私は今日、屋久島の最高峰宮ノ浦岳に登るのである。小杉谷からさらに四キロほど奥までトロッコに乗せてもらってそこから歩く。このあたりの屋久杉はほとんど伐採されて新しく植樹されたところもあった。私達は急坂だけれど近道を登ったので短時間で高度をかせいだ。やがて道は、スギ、ツガ、ヤマグルマなどがうっそうと茂った保護林に入った。右手に深く安房川の本流が流れ、所々で支流の小さな谷川を横切る。樹の茂みが空いて見晴らしのきく所では一休みして写真をとる。昼前に屋久島連峰中の天然の公園といわれる「花ノ江河」についた。美しい湿原で前方に黒味岳の堂々とした姿があった。ここで食事をして宮ノ浦岳に向った。黒味岳の石をまいてしばらく登ると、屋久島特産のヤクザサがあらわれ、道はなだらな山腹をたどってゆく。山頂付近に雲が湧いてきた。

午後二時、宮ノ浦岳の頂に立った。永田岳の方は雲にかくれて、見えなかったが、他の方はよく晴れていた。今までどこか非常に奥深い山の中を歩いているような気がしていたが、山波の向うに海を見た時、やはり島にいるのだという実感が湧いた。写真をとり頂上の石を拾って下山の途についた。

トロの終点で、発電間際の汽関車を捕えたのはよかったが、運転台が狭くて、私は屋根の上に乗せられてしまった。最初はふり落とされそうで、余りよい気持ではなかったが、しばらくすると屋根の上であぐらをかき、口笛を吹く位ずうずうしくなった。

さらば屋久島

翌日安房に下り、尾之間、栗生宮ノ浦などの海岸植物の調査を行なった。屋久島は「月に三十五日雨がふる」といわれる位、雨の多いところだが、私達は日頃の行ないが良い為か、あるいは船の上の祝杯がきいたのか、ずっと快晴に恵まれて所期の目的を達し、十月二十一日の十一時四十五分、屋久島空港を発って鹿児島に向った。

さんの今後の活躍を期待しながら別れを告げたのである。

（H・O）

すぽっと
あくまでも謙虚で
温室育ちになるな！

高知地方裁判所判事　23回生　下村幸雄さん

「静粛に！」といえばすぐ裁判所を思いだすことだろう。今回はその裁判所にお勤めになっている下村幸雄さんを高知大学にお訪ねした。

ここは大学内の静かなある一室。なんだかおちつかない気持ちでお待ちしているところである。下村さんの御経歴についてチョット書いておこう。土佐中旧制高知高、東大法学部と進まれた後、二年間司法修習生をやられ、大阪地裁を経て一昨年にこちらにこられた。そして現在の肩書きは高知地方裁判所判事補である。だのになぜ高知大学などにお訪ねしたのかと不思議に思われたことと思うが、それはここで刑事訴訟法について講義をされているからである。

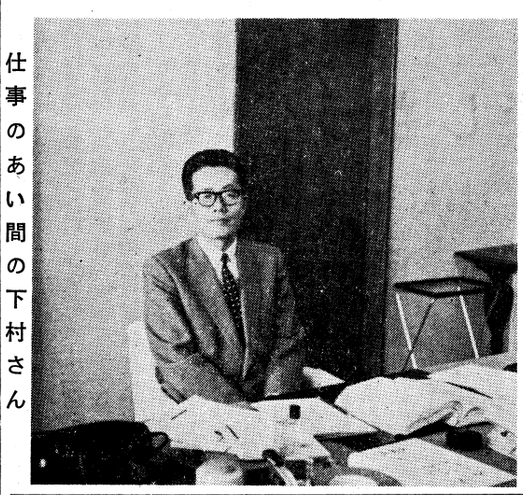
――やがてキリッとした背広に黒わくめがねの紳士がさっそうと現われた。言うまでもなく下村さんである。「はじめまして、さあどうぞ、どうぞ。」と気軽にいすを勧めて下さる。さらに慣れた手つきで、お茶を入れて下さったのには全員恐縮。「さあ何でも質問して下さい。」とのお言葉があり、まだ雰囲気に慣れないまま第一問。

「裁判官になられた動機は？」

「まあ性格が向いていたのでしょうネェ。物事を積極的にするよりは人の言っているのを判断するのが好きなんだナ。大学三年目までは何も考えてませんでした。まったくのんびりしてたなあ。だいたい法学部はどこでも就職できるからネ。」まことにうらやましい限りである。試験々々と追いまわされている我々に比べて。「それにインターンとちがって、司法修習生は給料がでるんです。国家の為には何もしていないのになんだかすまないようですネ。その後ぼくは裁判官を選んだわけですが、好きですネェ。この仕事。けっこう楽しくやっていますョ。でも一生裁判官としての僕に満足はできないでしょうネ。人を裁く資格という点から考えて。ヤッパリこの仕事は神経を使うせいか、裁判官には弁護士ほど太った人がいません。」なるほど下村さんも……。「でも実刑を言いわたす時はイヤですネェ。有罪と決まっていても、執行猶予にするか、実刑にするかは言いわたし直前まで考えることがあります。」「我々の間では家庭でするこを宅調と言っていますが、前とちがって今はそんなことはありません。帰ってからはテレビを見たり、音楽を聞いたりしています。休日には子供と出かけたりもしますヨ。でも教育にはタッチしません。テレビでは「弁護士プレストン」と「逃亡者」を人生劇としてかさず見ています。外人の会話の中には思想が感じられるからネ。」と、さも御満悦そう。

「話は変わりますが、土佐中時代で特に印象に残っている先生は？。」「西野先生です。僕の初めて接したインテリでしょう。」最後に今の土佐校生についてお聞きすると「『エリート意識をもつな』ってことを言いたいですネ。ぱい菌の中で強く生きぬいていくというのが、雑草的なというのが、つまり『温室育ちになるな』ということです。」と言われた。そのやさしい先輩の言葉を胸に我々は下村さんの今後の活躍を期待しながら別れを告げたのである。

（H・O）



仕事のあい間の下村さん

本紙記者座談会
一年間の反省と未来展望
生徒の自主活動を爆発させよう
低調マンネリ……悪循環に終始

全く停滞の本校

――本学年もいよいよ終りに近づき、二月五、六日の文化祭を最後のメーン・イベントとして、みんな一学年ずつ進むわけだが、ここでわが土佐高一年間のあり方を反省し、来学年度のヴィジョンを語り合いたいと思う。各記者の率直な意見をのべてほしい。〝ガラにとじこもる高校生〟の汚名を返上するためにも……。

C この一年間の校内問題をふり返って一言でいえることは〝ヤマがなかった〟ということ。

D まったく停滞していた。

B 生ぬるかったよ。これは毎年のことだけど……。

E それが最も顕著にあらわれたのが校内弁論大会（六月）だった。自由参加という形にしたところ、25パーセント程度の生徒しか出席しなかった。「やるならやれればよい」という無関心な態度。

B しかし内容的にはサエていたよ。少くとも三年前よりはマシだった。ぼくぜんとした世界状勢、社会状勢という問題ばかりでなく「私と部活動」（堀見君）など校内の身近な状況を一生懸命考えてゆくという積極さが弁士にはあった。

A だけど、そういう生徒が実際に活動しているかどうかは問題だ。発言はしても、積極的に協力して活動してゆくという姿勢がない。美化委員会などを見ていてもそうだ。

B それは一部の生徒のことでクラスでの具体的な活動や部活動という、行動が伴っている者もいるよ。しかしそのような動きは全体的なものでなく、生徒会にしろ部活動にしろ、やはり特定の人物に限られてくる。

野生的な先生が欲しい

――このへんで生徒会の活動について。

E 委員会は開かれるたびに流会。とくに二学期はひどかった。

D それで生徒会解散の声が出て〝解散決議〟直前まで行った。

C けっきょく特活部から訓示を受けてサタやみ。

A いちど解散したほうがよかったと、ぼくは思うよ。解散による大反響を校内に起こしたうえで改めて新しい発足をしたほうがよかったんじゃないか。一種のショック療法だな。（笑）

B だけど、その場合、はたしてフレッシュなメンバーが出てくるかどうかは問題だ。毎年同じ顔ぶれが選ばれていると「自分たちがやらなくても、あの人たちがやってくれる」と考えて、無関心になってゆく。どんな方法をとっても、結局そういう悪循環におちいるようだ。そこで、ぼくの提案しら何もできないんだ。レクリエーションだけでは心のつながりは出来ないんだから……。

C 話し合いをすることにおいて親交が芽ばえると思う。

D 実際の気持としては、みんな話し合いたい問題をもっているんだ。人生観や異性との交遊問題など……。しかしそれはHRという公的な場では話しにくい。

B クラスそのものが出来てないから、話し合いが出来ない。また話し合いをしないからクラスが出来ない。――これも悪循環だなあ。（笑）

E ほとんどの生徒が話し合うクラスを作りたいと思ってはいるが、だれかが指導者になってほしいと期待するだけで、自分から進んで先頭に立とうとはしない。

B 先生はもはやアドバイサーではなく、傍観者になってしまっている。ウヤムヤのうちに現状を維持してゆこうという姿勢だ。

E 「こんどのHRでは、君たち何をして遊びますか」というような調子だからナサケないよ。生徒をただ管理しているだけというだけという感じだね。

A 先生のほうが生徒との話し合いを避ける。仕方がないから生徒たちで考えたことを決議して持ってゆくと「ダメだ」という。これでは生徒はますます先生を相手にしなくなるばかりだ。

B 野生的な先生が欲しい。若い先生はおとなしすぎる。年代的にも中間的な先生が出て行かれて、生徒と先生とのへだたりが出来すぎているんじゃないか。

D 来年度は放課後に、若い先生をかこんでチーチ・インをどんどん開こうよ。テーマは「神は存在するか」「友情論」「恋愛論」など……。

学園祭を一週間やれ

――文化祭も、なんだか盛り上りが見られないまま開かれそうだね。一般生徒の参加を認めないという学校側の方針に影響されたところも多いだろうが……。

B 従来のままの形ならやめたほうがよい。内容もマンネリだしネ。むしろ〝学園祭〟としてやれと言いたい。運動会、文化祭、弁論大会、理科発表会をひとまとめにし、もちろん一般人にも開放してやる。

C 賛成！　期間は一週間、開校記念日（十一月十八日）を中心にして大々的にやる。

D 大がかりなものだから二年間に一回でよい。ぜひそんな形でやりたいね。

B 運動会デモも禁止されたが禁止するなんて古い考えだよ。生徒の自主的な活動を学校側は助成してもらいたい。昨年は不許可でもデモを強行したが、新聞にも報道されたりして好評だった。

C 「運動会はお祭りさわぎではない」というのが禁止の理由らしいが、お祭りの要素があってもいいと思うんだ。

B 運動会デモが計画されたのは、自分たちのやることを一般の人たちにも広くアピールしたいという考えからだ。ぼくはやりたいと思うよ。なぜ、やっちゃいけないのか、理由が知りたい。たまには解放された気分も味わいたいんだ。

A そういう活動の中から仲間意識が生まれてくるしね。

B 去年は高三は酒ダルの古いのを買いこんでおみこしまで作っていたらしい。ガックリしていたよ。

――不満ばかり出てきたね。この一学年を通して、なにかスカッとしたような出来事なかったのかな？

E ある。森田美栄子さん（高二）の旺文社特派世界一周旅行。これ一つくらいだろう。

B 彼女、しあわせだな！

A チクショー。（笑）

――われら新聞部の活躍は明るい出来事じゃなかったのかい。

C お世辞にも活発だったとはいえないね。（笑）

D 批判だけはやって来たつもりだけど、深く突っこんだ記事を作ることができなかった。これじゃいけない。来学年はがんばろうぜ。

――どうやらこのへんで紙面のアナうめも出来そうだから、記者座談会も終りとしよう。（笑）

出席記者　丁野、藤宗、大原、植田、上村

学園祭を一週間やれ

――文化祭も、なんだか盛り上りが見られないまま開かれそうだね。一般生徒の参加を認めないという学校側の方針に影響されたところも多いだろうが……。

B 従来のままの形ならやめたほうがよい。内容もマンネリだしネ。むしろ〝学園祭〟としてやれと言いたい。運動会、文化祭、弁論大会、理科発表会をひとまとめにし、もちろん一般人にも開放してやる。

C 賛成！　期間は一週間、開校記念日（十一月十八日）を中心にして大々的にやる。

D 大がかりなものだから二年間に一回でよい。ぜひそんな形でやりたいね。

B 運動会デモも禁止されたが禁止するなんて古い考えだよ。生徒の自主的な活動を学校側は助成してもらいたい。昨年は不許可でもデモを強行したが、新聞にも報道されたりして好評だった。

C 「運動会はお祭りさわぎではない」というのが禁止の理由らしいが、お祭りの要素があってもいいと思うんだ。

B 運動会デモが計画されたのは、自分たちのやることを一般の人たちにも広くアピールしたいという考えからだ。ぼくはやりたいと思うよ。なぜ、やっちゃいけないのか、理由が知りたい。たまには解放された気分も味わいたいんだ。

A そういう活動の中から仲間意識が生まれてくるしね。

B 去年は高三は酒ダルの古いのを買いこんでおみこしまで作っていたらしい。ガックリしていたよ。

――不満ばかり出てきたね。この一学年を通して、なにかスカッとしたような出来事なかったのかな？

E ある。森田美栄子さん（高二）の旺文社特派世界一周旅行。これ一つくらいだろう。

B 彼女、しあわせだな！

A チクショー。（笑）

――われら新聞部の活躍は明るい出来事じゃなかったのかい。

C お世辞にも活発だったとはいえないね。（笑）

D 批判だけはやって来たつもりだけど、深く突っこんだ記事を作ることができなかった。これじゃいけない。来学年はがんばろうぜ。

――どうやらこのへんで紙面のアナうめも出来そうだから、記者座談会も終りとしよう。（笑）

出席記者　丁野、藤宗、大原、植田、上村

皆様の――お帽子の店
土佐中高指定
元田帽子店
高知市帯屋町2丁目南側
TEL ② 2591

紳士服装専門店
――お誂紳士服
――高級既製服
――レジャースポーツ
≪土佐高制服、オーバー≫
廣松屋
大丸北口前　TEL ②2338

〝土佐名産〟
特製〝金波〟
立石蒲鉾店
高知市京町4
大丸東側　TEL ②6279